ヒゲの奮闘

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒゲの奮闘

【Nコード】

N2926F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

貧打に喘ぎ投手陣に頼りきりだった頃の阪神。この試合もエース村山を登板させながらもやはり打てない。しかし一人の思わぬ伏兵が。昭和四十年代の阪神の試合のうちのー試合を小説にしました。

第一章

ヒゲの奮闘

野球は巨人だけではない、こう言われて久しい。少なくともテレビで巨人の提灯ばかりを持っている輩共がいる状況を見ていればそうも思いたくなる。

そのアンチテーゼとして阪神がよく挙げられる。この球団にはやはり魅力がある。

勝とうが負けようがそこには華があるのだ。どんなに呆れる大敗をしても、どんなに鮮やかなサヨナラ勝ちをしてもそこには華がある。こんな球団は阪神だけである。

立派な勝利も無様な敗北も阪神には似合う。それは何故か、それが阪神だからだ。

かつて巨人の黄金時代があった。幸いにして筆者は巨人の黄金時代などという暗黒時代には生まれてはいない。私を知る巨人は既に過去の栄光にすぎるだけの似非盟主であった。巨人が負けるということとは非常に喜ばしいことだ。巨人が優勝したら景気がよくなるというのは愚者の妄言だ。中学校一年、いや小学校一年程度の知能があればそんなことは関係ないのがわかる。それを堂々と言っている大人が多いということは我が国の知的レベルがそんな劣悪なレベルにあるということだ。まことに嘆かわしいことである。

巨人が勝って喜ぶ者よりも巨人の負けを見て元氣が出る者の方が遥かに多い。それを考えると巨人の敗北は日本にとって非常に良いことなのである。

そもそも巨人は勝ち続けなければ成らない運命にあるという。そんな巨人の何処に華があるのか。勝たなければ華がないのは本当の華ではない。負けても華があるのこそが本当の華なのである。

その点阪神は素晴らしい。引き分けでも華がある。そう、引き分けであってもだ。それは昔から変わりはない。そう、遥か昔から

だ。

昭和四二年四月三〇日、この時代の阪神には絶対的なエースが三人もいた。

まずはザトペック投法村山実。一切手を抜かない、まさに命を賭けた投球で多くの強打者を討ち取ってきた男である。その背負う背番号十一はあくまで美しく、そして凜々しかった。今その背番号は誰にも付けることが許されてはいない。村山だけに贈られる背番号、それが阪神の十一だ。記録を残し、人々の記憶に永遠に残る、そんな男だった。強大な巨人、とりわけミスタープロ野球長嶋茂雄に真っ向から立ち向かい、討ち取るその姿はまさに華であった。村山こそまさに阪神の象徴であった。彼は長嶋に対して決してアンフェアなボールを投げなかった。常に正面から投げ、そして勝負した。彼はマウンドにその全てを捧げていた。

次にバツキー、その変則投法を気の強さで知られていた。パームにナックルで巨人の強打者達を倒していく。巨人相手にノーヒットノーランを挙げたこともある。

最後に黄金の左腕江夏豊。阪神史上最高の左腕であった。唸り声をあげる剛速球が何者をも捻じ伏せた。王も彼の前には苦戦した。彼は今も阪神の心をその中に宿している。その心は阪神にのみあるのだ。

だがこの三人を擁していても阪神は優勝出来なかった。絶対的なエースが三人いても。ピッチャーはよかったのだが打線が弱かった。その為容易に勝てはしなかったのだ。

だから阪神は優勝出来なかった。昭和三九年に優勝してから二年も。貧打が全てを悪くしていた。この四二年も。だから村山はこの日も完封する気で投げていた。甲子園のマウンドに仁王立ちしていた。

「村山、やったれや！」

「相手が鯉でも容赦するなや！」

この時代も阪神ファンは変わらない。熱狂的であり、他には何も

目に入らない。この日は広島が相手なので観客は巨人戦の時程ではなかったがそれでも二万近くがいた。

村山は相手が誰であろうと手は抜かない。それが巨人であろうと当時弱小球団であった広島であろうとも。この時の広島は黄金時代なぞまだ先の華のない球団であった。衣笠はまだ頭角を現わしてはおらず、山本浩二もいなかった。後に広島の二枚看板となった二人がいないのだ。それを思うとやはり寂しいものがあつた。

だが投手陣はよかつた。少なくとも阪神打線を抑えるには充分であつた。

「今日は打つやるかな、あいつ等」

「さあ」

一塁側はおるか三塁側にもいるファン達は少し諦めた目でナインを見ていた。

「打たへんのがうちの打線やからな」

「そやな。けどホンマどうにかならんのかいな」

ファン達はいつも打線のふがいなさを見て溜息をついていたのだ。かつてダイナマイト打線と呼ばれたのは遠い過去である。阪神の看板の様に言われているが実は阪神は伝統的に投手のチームである。それは今でも基本的に変わりはしない。どれだけ弱くてもピッチャーで困つたことはあまりない。先発にも中継ぎにも抑えにも。右も左もいる。甲子園がそれを欲しているのかいつも個性に満ちたピッチャー達がマウンドにいる。だが野球は九人、ベンチを入れると二十五人、そして監督やコーチも入る。総合力で行うのだ。ピッチャーは確かに最も重要だがそれだけで勝てる程甘いものではないのだ。落合博満が守備力を徹底的に重視するのもそれだ。ピッチャーをフォローする防御力があるからこそ彼の采配は生きるのだ。そして打線も。そういった諸要素がないと野球は勝てない。この時代の巨人は投手力もさることながらナインの守備力も他の球団の追隨を許さなかつた。打線には王と長嶋がいた。だから無敵だったのだ。

巨人程の総合的な守備力はなく、打線は比べるのも憚れる程御粗

末であればどうなるか。言うまでもない。だからこの時の阪神は勝てはしなかったのだ。この日もそうであった。

四回を終わって阪神のヒットは何と僅か一本。対する広島は三安打。華のない広島打線よりも下であった。

「今日もさっぱりやな」

「何でこんなに打たへんねんやるな、いつも」

ファンは攻撃の時には暇であった。忙しいのは守っている時だ。そんな雰囲気も今日も甲子園に満ちていた。

「甲子園の神様のたたりちやうか」

誰かが言った。

「何でやねん」

「そやけどよ、あの山内ですら打ってへんやるが」

エースの一人小山正明を放出までして取った大打者山内一弘を指差して言う。

山内はパリーグ時代大毎の四番だった。ミサイル打線と謳われた強力打線の軸であり、オールスターでは常に四番を打っていた。だがその彼が阪神に来てからは華々しい活躍をしなかったのだ。

「何てや」

ファン達はそれが不思議でならなかった。

「あれは世紀のトレードやったんやる」

「そやったな」

それには皆頷いた。エースと主砲の交換トレードだ。何事も派手なことが好きな大毎のオーナー永田雅一の宣伝だが阪神もその言葉に乗り気だった。しかし結果は思わしくなかったのだ。少なくとも阪神ファンにとっては。

「こんなんやったら小山放出せんかったらよかったな」

「今更言うてもな」

阪神ファンのぼやきとたら、ればはこの時から既にあった。

「山内のかわりに他の奴呼んだらよかったんや」

「誰やったらええねん」

「大リーグから一人呼んで来んかい」

「アホ言うな」

流石にそれは一笑に伏された。

「王か長嶋で我慢せい」

「ほな近鉄の土井か南海の野村呼ぶわ」

「阪急のスペンサーでもええんちゃうか」

「ホンマなあ。他のチームが羨ましいわ」

とにかく彼等はばやいた。そこまで阪神打線は打たなかったのだ。マウンドの村山は好投している。だが打線は相変わらず沈黙を続けたままであった。

ピンチにも異様に強い男であった。何度も得点圏にランナーを置きながらもそれを捻じ伏せる。剛速球とフォークが唸り、相手を寄せ付けない。だがそれは阪神打線も同じであった。

「アホ、御前等何時打つねん！」

六回なぞは無死一塁二塁でよりによって三番の遠井吾郎が併殺打であった。遠井は一回にも併殺打を打っている。

「吾郎さんよお、あんたも四番打つたことがあるんやろが！」

ふがいない遠井の打撃に野次が飛ぶ。

「同じ左でも巨人のあれとはえらい違いや」

遠井は左投げ左打ちである。王と全く同じなのだ。

「あれ巨人やなくてうちに来とつたらなあ」

実は王は最初阪神のスカウトが接近していた。しかし巨人に奪われたのだ。

第二章

「今頃阪神左団扇やったで」

「そやな」

王が最初ピッチャーだったことは奇麗に忘れている。勿論入団してから三年目まではあまりパツとしないバッターで荒川との特訓により今の王があることも見事に忘れていた。彼等の記憶にあるのは無慈悲なまでに打ちまくる、あの一本足打法の王だけなのだ。

この併殺打が響いた。六回も無得点で終盤に入る。だが阪神打線のバットは相変わらずだ。

「風邪ひくわ、ホンマ」

誰かが空を切り続ける阪神打線のバットを見て言った。

「風を切るのは相手のバットだけで充分や」

「何で春やのにこんなに寒いんや」

それに合わせて誰かが言った。

「そらうちの打線が風を送ってくれとるからや」

「カープのとちやうんか」

「ちやうちやう。まあ向こうも似たもんやがな」

「そやな」

見れば甲子園のスコアボードにはゼロが並んでいるそのまま遂に九回を終えてしまった。

「で、九回や」

「わしもう疲れたで」

そうは言いながらも帰ることはない。ここまで来たら最後まで観るつもりであった。

試合は進む。だが両チームまだ得点はない。

十回の阪神の攻撃はクリーンアップからである。だがあまり期待はされていない。

そしてやはり三者凡退であった。ファンはとりわけ四番である山

内を厳しい目で見ていた。

「山内やけどな」

「ああ」

一塁側のファン達が話をしていた。

「あいつ何であんなに打たへんねん」

「そんなことわしに言うてもなあ」

「あいつ確かミサイル打線の四番やったんやろ？」

「そや」

それは本当のことである。

「タイトルも取つとるで。ホームラン王かて打点王かて。しかも首

位打者も」

「完璧やないか」

ファンの一人がそれを聞いて言った。

「パワーだけやないんやろ？」

「そのテクニクかて相当なもんやで」

これは本当のことであった。シュート打ちを得意としており、山内に内角攻めはあまり効果がないことで知られていた。現役を退き打撃コーチになってからもその打撃理論は有名で多くの好打者、そしてバランスのいい打線を作り上げてきた。巨人ですら彼の力を借りることがあった。『カツパエビセン』とも呼ばれた。教えはじめたら止まらない、選手に付きつきりて熱心に教える。彼は打撃理論においても超一流であるのだ。

「それで何であんなに打たへんねん」

「謎やな」

「甲子園の祟りちゃうか」

誰かが言った。

「祟りか」

「そや、甲子園やで」

皆ヒソヒソ話になった。よく球場には魔物がいると言われているがこの甲子園はとりわけそう言われることが多いのだ。

甲子園球場は阪神だけでなく高校野球でも使われている。その幾多の試合でドラマが行われてきた。何が起るのかわからない、それが高校野球であり甲子園なのだ。だからよく魔物だの祟りだの言われるのである。

「山内に何か取り憑いたんちゃうか」

「魔物がか」

「そやる。そうやないとおかしいで」

「ううむ」

それを聞いて腕を組んで考え込む者がいた。実はこれはあながち間違いではなかった。

「広いね、この球場」

山内は甲子園を評してこう言った。

「東京スタジアムとは全然違うよ。広いとは聞いていたけどこんなにとはね」

少し苦笑いが入っていた。彼が思うように打てなくなった理由はここにあったのだ。

彼が最初にいた大毎は狭い東京スタジアムを本拠地に使っていた。永田が作ったこの球場はヤンキースタジアムをモデルにしていたがその広さはとても再現出来なかったのだ。あまりにも狭かった。その為強力な打線が活躍できたのだ。

山内もそれは同じだった。しかしそれが甲子園に変わると。どうしてもそれを意識してしまったのだ。

「ラッキーゾーンもあるんだけどな」

彼はこうも言った。それでもどうしても外野フェンスを意識して大振りになる。それで彼のバッティングにも狂いが生じてしまっていたのである。

実はこの山内と小山のトレードはその宣伝にも関わらず首を傾げる者がいた。広い甲子園に山内をやり、狭い東京スタジアムに小山をやる。逆ではないのか、と。

「あれは実は阪神の御家の事情や」

そう囁く者もいた。そしてこれはどうやら真実であつたらしい。エースである小山は阪神の一つの派閥になつていた。もう一つの派閥はシヨートであり牛若丸と呼ばれた吉田義男だ。吉田はパワーはないが芸術的な守備と巧打、そして俊足で知られていた。とりわけその守備は素晴らしく今でも最高の守備だとさえ言われている。エースの小山とシヨートの吉田の派閥はそのまま投手と野手になつた。食事の際も遊ぶ時にも小山と吉田に別れていた。そしてそこに若きエース村山が入つたのだ。

第三章

村山もまた派閥になった。三つ巴である。これ以上の派閥はチームの崩壊になると見たフロントが動いたのである。

こうして小山は放出された。近年までしょっちゅう紙面を賑わせていた阪神の御家騒動の一つである。実は村山放出も考えられたがそれよりも小山が放出されたのだ。

「あのトレードは世紀の失敗だ」

こう評する者もいた。実際に山内にとっては失敗であった。そして阪神にとつても。結局阪神は御家騒動でその力を弱めたのだ。なおこれはこの件が最初でなければ最後までもない。阪神の御家騒動はそれこそ毎年であった。ここまで騒動の多い球団もそうはない。とりわけ監督交代はいつも事件であった。

十回裏の阪神の攻撃は三者凡退だったが広島はそうはいかなかった。彼等は村山を攻めてきたのだ。

途中から代打を経て五番に入っていた広島の寺岡孝にタイムリーツーベースを打たれた。それで一点入ったのだ。

「こらあかな」

「ああ」

殆どそれで諦めてしまった。その裏阪神はあつという間にツアーウトになった。

「帰るか」

「そやな」

ファン達も帰ろうとする。だが阪神はまだ諦めていなかった。

「ピンチヒッター」

監督である老将藤本定義が審判に告げていた。口髭を生やした男がバットを持って出て来た。

「おい、髭やぞ」

「あつ、ホンマや」

辻佳紀である。口髭を生やしていることから髭と渾名されていた。明るく活気のいい人柄でファンに愛されていた。この試合ではそうではなかったが村山とは名バッテリとして知られていた。バッテリーをリードしていたのも彼である。

打率は悪いが意外なパンチ力で知られていた。ファンもそれに賭けることにした。

「どのみちこれで最後やしな」

「最後まで観るかい」

腰を戻した。そして試合を見守った。

結果は意外なものであった。嬉しい意外である。辻は疲れの見える池田からソロアーチを放った。これで同点となった。

「振り出しに戻りやな」

しかしファンは醒めていた。同点になったからといってそうそう楽に勝てる状況ではないとわかっていたからだ。

その予想は見事に当たった。次の藤田平がヒットを放ったがそれで終わりだった。こうして延長十二回に入った。

阪神は十二回は石川緑で凌ぎ、十三回からは左腕の権藤正利を出してきたのだ。

この権藤はあまり運がないイメージがある。独特のカーブを持ち味としているが当初は阪神以上に貧打が深刻であった大洋にいたこともあり好投しながらも勝てず二八連敗という不名誉な記録を持っている。この阪神時代もカーブの多投で左肘に炎症を持っていた。その為苦しんで投げていたのだ。

「権藤には勝たせてやりたいけどな」

「大丈夫やるか」

ファンの顔は心配なものであった。それでも権藤は凌ぐ。だがその凌ぎが何時かは崩れるのは誰の眼にも明らかであった。悲しいことに。

「早よ打たんかい、ホンマに」

「凡打と三振ばっかりやるが」

スコアボードには相変わらず零が続く。十一回から双方無得点だ。そのまま呆れる程いい当たりがないまま試合は進む。遂に試合は十七回にまで至った。

「流石は甲子園や」

誰かが皮肉混じりに言った。

「このまま十八回までいくかもな」

「そやな」

隣にいたおっさんがそれに相槌を打った。

「それで再試合や」

甲子園は十八回まででありそれでも終わらなければ次の日に再試合である。実際にそうした試合が今までにも何回かある。戦前は終わるまでやっていった。

「いや、この回で終わりやろ」

「そうなるか？」

「時間見てみい」

そう言いながらバックスクリーンの方を指差した。

「もう試合はじまって四時間以上やで」

「そんなに経ったんか」

「そやからや。まあこの回で終わりやな」

「そうか。長かったなあ」

皆それを聞いて溜息混じりに言う。

「そやけどや」

「何や？」

「勝つかどうかまではわからんで」

「どうなるかな」

「権藤の調子次第やろ」

「権藤のか」

それを聞いて誰かが暗い顔になった。

第四章

「何かあるんか？」

「権藤やる。もうバテとるんちゃうか？」

「もつってまだ投げはじめて五回にもいっくらへんで」

「権藤の調子もよおないみたいや。それで五回は」

「まずいか」

「ああ、めっちゃまずいな」

その男はマウンドに向かう権藤を見ながら言った。

「今の権藤はな」

「あかんかな」

「やばいやるな」

見れば権藤の顔には疲れが見えていた。それはボールを受ける辻からもわかった。

「こらあかんかもな」

権藤のボールを受けてそう思った。球威が明らかに落ちていたのだ。

しかしそれでも勝たなければならない。彼は覚悟を決めて権藤をリードすることになった。

「もし打たれたら」

彼はその中にある決意を秘めていた。

「その時はわしが」

男である。その心には熱いものが秘められていた。今それに火が宿ろうとしていた。

権藤は崩れた。残念ながら辻の予想は当たった。

貧打の広島打線に足も絡めた攻撃を受け四点を失った。これを見て誰もが終わったと思った。

「四点か」

甲子園の観客達はそれを見て呆然となった。

「あかんかな」

「かな、やないで。あかんわ」

殆ど全ての人間がそう思った。

「うちの打線が四点も取れるか。一点取るのも苦勞してるねんぞ」

「そやな」

「そや。どつかにスラッガーはおらんのかいな。ドコドコ打つスラッガーがな」

「法政大学に一人おるで」

「法政!? そんな大学あつたか!？」

関西なので関東の大学のことはよく知らない者もいるのだ。

「東京の大学や六大学の二つやで」

「というと安藤とかと同じか」

「そや」

阪神のスター選手の一人安東統男のことである。彼は慶応ボーイであつたのだ。実は辻も六大学の一つ明治大学にいたのであるが彼はそれをよく知らなかつたのだ。彼等にしてみれば明治大学といえは大洋の秋山登、土井亨のバッテリーであつた。このバッテリーに阪神もかなり苦しめられている。

「そいつは何でも凄いい奴らしいで」

「ほう」

「どんなやねん」

「ボールをポンポンスタンドに放り込んでるらしい」

「ポンポンか」

「ピンポン玉みたいにな。ヒョロ長い身体で化け物みたいに打つらしいわ」

「化け物かい」

「けど顔もええらしいで。ええとこのボンボンでな」

「ほお」

「キャッチャーで肩も強うてな。抜群の野球センスの持ち主らしいわ」

「欲しいな、そいつ」

「ああ、巨人やなくな」

彼等はそれを聞いて喉から手が出るのを感じていた。

「うちでなあ」

「四番に」

「欲しいのう」

「あつ、そいつのこと聞いてことあるで」

誰かが言った。

「確か田淵って奴やろ」

「そや、田淵や」

「あいつは止めた方がええ」

彼はそう言つて右手を横に振つた。

「何でや」

「あいつは東京生まれでな。ごつつい巨人が好きらしいんや」

「何つ、巨人が」

皆それを聞いて顔を一変させた。巨人と聞けば捨ててはおけない。巨人は関西では悪の象徴である。甲子園の一塁側で巨人を応援することは死を意味する。関西で巨人ファンに人権はないとさえ言われている。

「そんなん取つたらあかん」

「そやな」

「巨人を好きな奴は別や」

「いらんいらん、そんなん」

「巨人で正力にへいこらしとけや」

そう言つてその話はここで終わった。だが後にその田淵が阪神にドラフト一位指名されて阪神にやって来る。この年から僅か二年後に。彼は阪神の押しも押されぬスター選手となり甲子園の観客達を魅了する。阪神の心を代表するとまで言われた天性のホームランイチストが巨人ファンであったことは実は有名な話である。

戦いはよりによって延長十七回で四点差となった。これが絶望的

なのは誰の目にも明らかだった。しかし甲子園の魔物が神がよくわからない気紛れな存在はここでいつもの気紛れを起こしたのであった。

「代打、辻」

「あれっ、辻って」

「ちやうちやう、別の辻か」

「ああ、ダンプか」

ファン達はそれを聞いて納得した。当時阪神に辻は二人いた。一人は今マスクを被っているヒゲ辻であり、もう一人はダンプと渾名された辻恭彦である。そのダンプ辻が出て来たのだ。

ヒゲの辻が闊達な性格であるのに対してこの辻は理詰めの性格であった。藤本はそんな二人を併用していた。闘志を前面に剥き出す村山に対してはヒゲの辻を、観察眼に優れ、頭のいい江夏にはダンプの辻を。それぞれ使い分けていたのであった。

「打つやるか」

「どうか」

ファン達はあまり期待していなかった。だがその辻がヒットで出塁した。しかしファンはそれでも期待はしない。

「あと四点もあるんや」

「しかもうちのクリーンアップなんてな」

「打つ筈あらへんや」

「そやそや」

そして実際に彼等は打たなかった。遠井も山内も凡打に倒れた。二死である。とても四点という点差は返せそうになかった。皆諦めていた。

「阪神電車ではよ帰れ！」

「御前それリーグちやうやるが」

「それに広島は電車持つとらへんわ」

「あっ、そか」

当時関西にある球団は全て鉄道会社が親会社であった。リーグ

の近鉄、阪急、南海でもある。パリーグでは相手球団が負けているところした野次が飛んだのである。このファンはそれを真似して自分のチームに野次を飛ばしたのであるが。この時代も阪神ファンの野次は有名であった。対する広島ファンも相当なものであったが。

第五章

「次誰やねん。橋か？棒か？」

「藤井や」

「ああ、藤井か」

藤井栄治である。後に西武や近鉄で打撃コーチをしていく。鉄仮面と言われて表情がなく、しかも何も言わない男であるがどういふわけか打撃コーチとして定評があった。この時代の阪神もこうした味のある選手が大勢いた。個性に満ち溢れた愛すべき選手が多いのも阪神の伝統であり華がある理由の一つである。

その藤井がライト前に打った。これで一点返った。しかしまだ三点ある。

「猫の最後っ屁やな」

「猫かい」

「今のうちの何処が虎やねん。虎はピッチャーだけやろが」

「ホンマのこと言うな、アホ」

ここで投手の権藤が打席に入るが当然の様に藤本は代打を出した。自分と同じ姓の藤本勝巳である。

その藤本がまたヒットを放った。この日の藤本の代打策は見事な中していた。

そして次のバッター朝井茂治が四球を選んで満塁となった。広島はピッチャーをそれまで投げていた龍憲一から二十一歳の若い三好幸雄にかえてきた。

「また若い奴出してきおったな」

「粗野な、けど若しかすると」

「ああ、若しかしたらな」

二死とはいえ満塁である。阪神ファン達のボルテージがあがってきていた。そしてそれはマウンドにいる三好も感じていた。彼は甲子園の熱気に支配されてしまった。

「球場が揺れとるな」

ネクストバッサーサークルにいるヒゲの辻はそれを見て呟いた。

「面白くなってきたで」

そしてそれを見ながら笑っていた。

甲子園の揺れは独特のものがある。地震で揺れるのではない。人が揺らすのだ。

それが阪神ファンの力だ。彼は今それを感じていたのだ。

それに飲み込まれた若い三好に何をするにも出来なかった。彼は対する安藤に四球を与えてしまった。そしてむざむざ一点を謙讓してしまった。

「あと二点か」

「ひよっとしたらひよっとするで」

「ああ」

ファンのボルテージはさらに上がっていく。阪神ファンの熱気は天井知らずであった。

「おいヒゲ！」

打席に向かう辻に声をかける。

「打てや！」

「ここで打つたらあんた男やで！」

「これやこれ」

辻は背中にその歓声を受けながら不敵な笑みを浮かべていた。

「この熱気、これが甲子園や」

彼は笑いながらバッターボックスに入ってきた。

「取られた点は取り返す」

心の中で言う。

「それがキャッチャーの務めや」

ピッチャーをリードするキャッチャーの。それが義務だと思っていたのだ。

そう思いながらバッターボックスで構える。見れば三好はマウンドの上でオドオドしていた。

「ああなつたら終わりや」

辻はマスクを被る立場からピッチャーというものがよくわかっていた。

ピッチャーは投球術やコントロールといったものよりも重要だとされるものがある。それは『気』である。これの強い弱いはピッチングに大きく影響するのだ。

村山はその闘志で相手を捻じ伏せてきた。江夏は勝負師としての度胸だ。それぞれ持っていたからこそ彼等はエースになれたのだ。逆に言えばこれがないとピッチャーとしては難しい。巨人時代の新浦寿夫がなかなか大成しなかったのもこれだ。彼は気が弱かったのだ。

辻にはそれがよくわかった。伊達に村山とバッテリーを組んできたわけではない。彼は狙っていた。動揺する三好が絶好球を投げるのを。

三球投げ終わった。カウントはツーストライクワンボール、あと一球で終わりだ。それを見てファン達はいよいよ駄目だと諦めた。

「あと一球やぞ」

「もう終わりやな」

「はかない夢やった」

「ああ」

そんなことを言っていた。だがその中で辻の様子に気付いている者もいた。

「待たんかい」

彼は言った。

「どないしたんや？」

「辻はまだ諦めとらへんで」

「ホンマか？」

「ああホンマや、その証拠に目が死んどらへん」

「目が」

見ればその通りであった。彼はカウント的には追い込まれていた

が全く動じてはいなかった。むしろ三好の方がオドオドとしている。ファン達はそんな辻を見てまずは彼を見ることにした。

「若しかするとや」

「やってくれるかな」

「辻やからな」

意外性の男である。だから期待を覚えた。彼等は辻の打席をじっくりと見た。

三好の四球目が放たれる。ボールはやはり弱かった。そしてこれこそが辻が狙っていたものであった。

「よし！」

狙い済まして打つ。打球は快音と共にセンター前へ弾き返される。これでランナーが二人返った。土壇場で見事同点となったのであった。

「よっしゃ！」

「ダイナマイト打線の復活や！」

誰かが懐かしい言葉を口にした。

「辻、あんたはやるなあ！」

「その髭は伊達やないな！」

彼は今一塁ベースでコーチである後藤次男から褒められて満面の笑みを浮かべていた。サインもファンもそんな彼を笑顔で見っていた。試合は結局同点のまま終わった。だが阪神ファンにとっては勝ったような嬉しい試合であった。負け試合を見事引き分けにしたのであるから。

その試合からもう四十年経とうとしている。その時甲子園にいた人達は今も甲子園に来ている。

「あれから色々あったなあ」

「ああ」

彼等ももういい歳である。孫どころか曾孫がいそうな者までいる。

第六章

「甲子園はそのままやけどな」

「阪神は色々あったな」

「優勝もしたし暗黒時代もあったな」

「長かったな、あれは」

九十年代の長い低迷期のことを思い出していた。

「何時までも何時までも負け続けて」

「何もええことなかった」

「星野さん来るまではな」

「ホンマ碌なモンやなかったな」

今彼等の下では星野により鍛えられた選手達が練習に励んでいた。白と黒のユニフォームが彼等を包んでいる。

「打つことはないしピッチャーもへボで守備はザル」

「草野球以下って言われたな」

「中村も藤田も吉田もあかんかった」

「野村もなあ。さっぱりやった」

とにかく何をしても駄目だったのが当時の阪神だった。優勝する、という言葉は毎年朝のテレ朝系列で盛んに言われていたが誰もホラだと思っていた。阪神だけであった。負けてそれが物笑いの種になり、優勝すると言えば馬鹿にされるのは。だがよく考えればそれは阪神に華があるからなのだ。負けてここまで言われ、話題にされる球団は他にはない。どの様な見事な負けでもそこに華がある、それが阪神なのだ。

「八木のホームランもな」

「その前の巨人にアホみたいに九点取られて優勝されたのもな」

「ホンマアホみたいな試合ばっかやったな」

「去年のシリーズもな」

「ボケ、あの話題出すなや」

誰かがそれを聞いて露骨に嫌な顔をした。

「思い出したくもないわい」

「ものの見事にやられたからなあ」

「だからすんなって言うとするやろが」

「ああ、すまん」

「けれどな」

その中の一人が言った。

「やっぱ、この球場はええなあ」

「ああ、阪神もな」

皆それは同感であった。

「わし阪神以外はあかん」

「そやな、阪神応援したら他のチームはもう応援できへんわ」

それだけ阪神に思い入れがあるのである。ここまで愛されるのも阪神だけである。

「大勢の選手がここにおつたな」

「そやつたな」

話す間に目が懐かしいものを見ていた。

「藤村もおつたし別当もおつた」

「ああ」

「吉田に三宅、田淵にカーランド」

「ブリーデンにラインバック」

「バース、掛布、岡田つてな」

「岡田はそこにおるぞ」

「おっと、そうか」

見ればベンチから出て来て選手達の練習を見ていた。

「どんでんは今もおつたわ」

「そやそや」

「ピッチャーもな。江夏にバッキーつて」

今度はマウンドを見ていた。

「小山にな。村山も」

「村山か」

その名を聞くと一同しんみりとした。

「ええ男やったな、ホンマ」

「ああ、格好よかったわ」

「あんな凄いピッチャー、絶対出えへんで」

甲子園のマウンドに仁王立ちし、巨人、とりわけ長嶋に果敢に立ち向かっていた村山はもうこの世の人ではない。二十一世紀を目前にして旅立っていたのだ。最後まで阪神のことを想いながら。

「阪神をトコトンまで愛してくれたしな」

「ホンマに阪神が好きやったからな」

引退試合では江夏達に肩車をされて一塁側まで来たのだ。ライトスタンドラッキーゾーンのブルペンから。皆その時のことを思い出していた。そしてもう一人のことも。

「ヒゲもおつたな」

「そやったな」

その村山とバッテリーを組んでいた辻のことも思い出した。

「あの時はやってくれたな」

「あの時もや」

かつて引き分けになったあの試合のことを思い出していたのだ。脳裏にあの時のことが鮮やかに蘇る。まるで昨日のことであるかの様に。

「あいつも、もうおらへんねんやったな」

「今頃天国で村山と一緒に野球やっとな」

「そうか、天国か」

中にはどうしても辻がもういないことが信じられない者までいた。あの明るい笑顔がもうこの世のものではないことが信じられないのだ。

「今にもベンチから出て来そうやのにな」

「プロテクター着けてな」

「その辻も。おらんのやな」

急にもの悲しい気分になる。

「村山も」

「昨日まであそこで投げて、打ってたような気がするのに」

「もう。おらへんのか」

「いや、そらちやうで」

悲しくなつたところで誰かが言った。

「辻も村山もおるで」

「何処にや」

「ここにや」

その誰かが言った。

「あいつ等は今でもここにゐる。だからわし等もあいつ等のことを覚えとるんや」

「そうなんか」

「そや、見えへんか？」

彼は他の者にこう問うた。

「あいつ等があるのが」

「あいつ等が」

皆その言葉を受けてマウンドに目を凝らした。

すると不思議なことにそこに村山がいた。そして辻も。二人は何か話をしていた。

分かれてそれぞれの位置につく。村山が投げ、辻が受ける。懐かしい場面がそこにあった。

「ほらな」

「ああ」

辻は笑っていた。あの闊達な笑顔で笑っていた。彼等は今それを見ていたのであった。

「あいつ等もあそこにおる」

「わし等、何時でもあいつ等と一緒にゐるんやな」

「そや、阪神がある限りな」

「阪神がある限り」

「ずっとや」

旅立った筈の戦士達がそこに集い、また野球をしている。阪神のユニフォームを着て。それが見えるのもまた甲子園である。

ここには理屈はない。ただ野球があるだけである。戦士達の心は何時までも残っている。辻も村山もファン達も。彼等は阪神タイガースという球団が、甲子園がある限りそこにいるのだ。

ヒゲの奮闘

完

2006・6・24

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2926f/>

ヒゲの奮闘

2010年10月8日15時49分発行